



TITLE:

ワシントン豪傑物語 一蘭学はいかにして婦女童蒙むけ海外知識になるかー

AUTHOR(S):

平田, 由美

---

CITATION:

平田, 由美. ワシントン豪傑物語 一蘭学はいかにして婦女童蒙むけ海外知識になるかー. 人文學報 1995, 75: 61-86

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48441>

RIGHT:

## ワシントン豪傑物語

—— 蘭学はいかにして婦女童蒙<sup>からっぱなし</sup>むけ海外知識になるか ——

平 田 由 美

はじめに

- I 異国の発見
- II 『万国嚟』の構成とタネ本
- III 「横浜絵」の時代
- IV 「自由の女神」と「神仙女」
- V 引き裂かれた物語世界
- VI 未知情報と旧式回路

は じ め に

ここで扱おうとするのは、文久元（1861）年、仮名垣魯文によって書かれた『<sup>おきなえときほんこくばなし</sup>童絵解万国嚟』と題された合巻である。数多い魯文の著作の中からことさらこの『万国嚟』が選ばれたのは、もちろん異界や異国をゆるやかなテーマとして掲げる本研究班の方向づけによるものである。論者の興味の存ずるところは、たとえば黒田麴廬の『漂荒紀事』に代表されるような蘭学者による異国情報が、魯文という戯作者のフィルターをとおっていかに一般庶民にとっての海外知識になるかという一点である。

近世という時代が、閉塞された社会状況下において、まさにそのことを理由に人々の心が外なるものへ向かっていたという逆説を成り立たせていたことは、すでにさまざまに論じられてきた。近松の心中物や西鶴の諸国咄などは、異事奇聞が日常性の壁を突き破って、そこに安住していた人々の魂を揺るがすような文学へと昇華したものである。見知らぬ国についてのさまざまな言説はもちろんこの異事奇聞のカテゴリーに属するものだが、それは『南瓢記』（寛政十年）の発禁以来<sup>1)</sup>、表だってあらわれることはなかった。しかしたとえば、名古屋随一の貸し本屋「大惣」の蔵書目録ひとつとってみても、海外事情についての情報が、意外なほどの量と質をもって一般の人々に入手可能なものであったことは明らかである<sup>2)</sup>。

漂流記が板本として刊行され商品となるのは、近世も末期、文久三年にジョセフ・ヒコの『漂流記』がその端を開いてのことである。もちろんこれは黒船ショックの余波ではあったが、

注目すべきなのは早くもその二年前に、合巻のようないわゆる婦女童蒙むけ戯作において異国噺が出現していたことである。ヒコの漂流記の如きナマの体験によるものではなかったにせよ、蘭語・漢文には無縁の、ようやく仮名文字をひろい読みしう程度の読者の前に異国奇聞が開陳されたことの意味がいま確かめられてよい。

## I 異国の発見

数多い魯文の著作の中であって、『万国噺』が取り上げられることはこれまでほとんどなかった<sup>3)</sup>。しかし作者の存命中には、それが『西洋膝栗毛』や『安愚鍋』とならぶ彼の代表作であったことは、後年魯文自ら創刊した『仮名読新聞』に盟友岡丈紀が投じた次のような寄書からも明らかである。

余、神奈垣硯兄と交際るの日厚ふして茲に十有余年、故に硯兄の功蹟を知れり。往る万延辛申の年、滑稽富士詣十編二十巻を綴りて、一時大ひに世評を蒙り、看る者三馬鯉丈の風調絡繹いて今に絶ざるを愛玩、其名芙蓉峯と俱に高く、其間稗史の著述牛に汗し棟に充つ。兒戯と雖ども我各国交誼の始め、稚絵解万国話、世界人物誌を著はすに至りては最も童蒙開知の先鞭にて、且つ明治の新世に臨み西洋道中膝栗毛数編を綴り、その其名全国に普く、曾て外国人と雖ども当書名を知らざるは稀なり。

(明治九年八月十八日。原文は総ルビ、句読なし。以下の記事引用も同様に適宜ルビを省略し句読点をほどこした。)

文久元年に刊行された『万国噺』はその前々年、安政六年六月の三港開港、五ヶ国(露、英、仏、蘭、米)自由貿易許可という事態を当て込んだ際物であった。しかし同じ安政年間の一大事件たる大地震に取材した『安政見聞誌』(安政二年=1855)がわずか三昼夜で脱稿しているのに比べて<sup>4)</sup>、また前作『滑稽富士詣』(万延元年~文久元年=1860~1861)が万延元年四月朔日からの富士登山解禁をあてこんで閏三月に初稿を起こしていたのに比べても<sup>5)</sup>、この作の報道性は低いといわれねばならない。

大事件が目白押しに並んでいるこの時期の二年数ヶ月というタイムラグは、作の時事性をばかしてしまうほどに長い時間であると言えるだろう。にもかかわらずこれを当て込みの作とみるのは、例えば第一編の口絵で大きく取上げられているのが、ロシア、イギリス、フランス、北アメリカ州、オランダといった、まさに自由貿易の相手国たる五ヶ国であり、また編の主要部分をなすのがこれらの国々の事情であることによる。

岡丈紀が『万国噺』を「童蒙開知の先鞭」と称するゆえんは、もちろんそれが一般読者すな

わち戯作の読み手であるような人々に対して向けられた西洋事情紹介の書として、最も早い部類に属するためである。しかし、その啓蒙的姿勢をべつにして、異人の登場という側面から見れば、魯文にはすでに前年の『滑稽富士詣』がその先例としてある。

開闢以来三十七度めにあたるといふ庚申のこの年、四月朔日から八月晦日までの五ヶ月間、女子にいたるまでの登山が許された富士は多くの参拝者で賑わっていた。七月には英国公使オールコックが山頂へ達するのだが、『富士詣』にはぬかりなく富士登山をする英国人というのが登場する。七編の序（庚申三伏、万延元年夏）で二世種彦（笠亭仙果）は「されども今は窮理とやらの学問が流行して、お月様を泥亀の如く手どらまへにしかねぬ世界。彼蛮字<sup>かのくにもじ</sup>の横浜には、脚長手長小人島胸に孔の穿た人も、一目で見らるる自由な時節。デキデキに見た事を、お早う作るのが日本坊」と述べている。そして第九編は、「当庚申の秋七月中旬英国のミニストル主従富士登山東海道旅行の図」という口絵で始まり、第十編で繰り上げられるのは「横浜遊覧港崎の曲輪に至り」、かの岩亀楼（万延元年中に建設された外人目当ての遊郭のうち最大のもの）の座敷見物であり、「らしやめん」をめぐるひきおこされるドタバタ喜劇なのである。

オールコックの『大君の都』第二十章はこの富士登山にあてられている（「富士山への巡礼と熱海温泉訪問記」）。遊郭見物のくだりこそないが、道路沿いの村々で「全住民がいっせいにショックをうけたかのようにとび出して」くる様子が書きとめられている<sup>6)</sup>。瞠目したのは沿道の村人ばかりではなかった。『武江年表』のこの年の条には、異国貿易免許以来の横浜の、文字どおり山をくだくが如き変化と繁栄が書きとめられ、それをめぐる人々の興奮をつぎのように書きとめている<sup>7)</sup>。

……今年の春の半より同所戸部の山を崩して通路を開き、此の土を以て田圃を平均し、増徳院の上の山六万余坪の所、交遮の老樹を伐り、輦輶<sup>ごうかつ</sup>の荒草を蒔りて山上を平らかにし、又所々に橋梁を架し、亜国ミニストルの旅館を営まれ、夫より次第に西洋諸州の旅館に及ぼし、大廈峻宇<sup>つう</sup>を排ね、異域の諸州よりはたえず碇泊して貿易を専とせり。……巨万の商家は檐<sup>のき</sup>を列ね、妓家は各高楼を設け、又邸舎<sup>とまりや</sup>、拍戸<sup>りょうりや</sup>、劇場<sup>しばいごや</sup>の類に至る迄ともに賑ひ、人烟輳列し、万船常に来往し、舳舻海岸に連接して、疇昔の寂寥にひきかえ其繁鬧耳目<sup>はんどう</sup>を駭し、東関随一の港とはなれりける。……良賤こゝに輻輳し、四時の遊観絶ゆる事なく、連日抑留して帰るを忘れ、駅路来往の旅客も俱に躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>せるもの少からず。されば江府の男女、此の勝榮<sup>しょうき</sup>を視ざるを以て恥とはせり。

二年あまりの時間はタイム・ラグなどではなく、この新興港湾都市がこのような大土木工事によって出現するまさにその時間だったのである。あるいは魯文もまた、遊観する「江府の男女」にまじって港見物をしなかったともかぎらない。

開国という事態は魯文において、まず目の前に現れた異国人への好奇心となって『富士詣』に取り込まれた。しかしそれは伝統的な滑稽本に登場する、ありもしない人物の変種として、あるいは茶化しの対象としての存在でしかなかった。しかしかれらを乗せてやってくる船やその「旅館」は、圧倒的な力でもってかれらの存在感を変えた。『万国嚟』第一編のわずか二十丁のうちに十一回の多きにわたって綴られる「交易」という語は、この作の構想がいかなるところに発したかを饒舌にかたっている。魯文をとらえたのは、この人と物の往来を可能にしたかれらの国そのものへの興味であった。かれは横浜の港に停泊する船のむこう、巨大な洋館の背後に、それらをつくりあげる力をもった国々の政治や経済制度、風土文物といったものをみようとしていたのである。

## II 『万国嚟』の構成とタネ本

『万国嚟』は四編計八冊の合巻である<sup>8)</sup>。初編の序文には「万延二辛酉春」とあり、四編には「文久元辛酉秋」とあるところから、初編は万延二年が二月十九日に文久に改元される以前の刊行、江戸の出版慣行からみて新春の売出しにむけて前年中に執筆されたものであろう。そして四編までを文久元年中に刊行しきったものである。

第一編ではその序において、太平の恩沢が寝ながらにして海外万里の情態に精通せしめることを言祝ぎ、童蒙婦女に読みやすからぬ漢蘭の異文字音を「皇国<sup>みくに</sup>倭字<sup>もじ</sup>に<sup>ときやわら</sup>解和げ。万里外の情景を諸書の中より<sup>(ママ)</sup>拔翠し」たと述べる。

第一編上巻は「仏蘭西国部」と「英吉利国部」より成り、各々の国の地理や政治経済といった国情が紹介される。フランスの部の冒頭「その都を<sup>パリ</sup>と<sup>す</sup>いふ。はりすのほとりにせいね川といへる大川あり。このところにはしろ十八、まちかず七百十三ちやう、いへかず三万、にんじゅ六十万ありてそのはんじやういふばかりなく……」はじつは箕作省吾の『坤輿図識』第二巻「仏蘭西」の「其主府ヲ、把理<sup>バリス</sup>スト云、<sup>セーネ</sup>舍溺河畔ニ在リ、城門十八、街衢七百十三アリ、府内人煙櫛比、百貨具ハラザルモノナシ、戸数三万、人口六十万……」をほぼそのまま用いていたものである。同様に、イギリスの部の「そのみなみのかたは、からいすといへるうみのけわしきやまをへだちて、おらんだふらんすのりやうこくにむかひあふ。そのあひだへだゝることわづかに十二、三。よきかぜにはをあげてふねをはしらするときは、いちにちにしておうらいするなり」は、同じく『坤輿図識』第二巻「大貌利太泥亜<sup>ブリタニヤ</sup>」の条の「其南辺、仏蘭西国ニ対スル処ノ海峡ヲ、「カライス」ト名ツク、幅員纔ニ十二三里、便風一夜ニ往還スベシ」に拠る。その他、ロンドン橋の景観や貿易船の船印など、『坤輿図識』を流用した記述は枚挙にいとまがない。また下巻の「魯西亜国の部」は、そのほとんどすべてをピョートル大帝伝についてやすが、これも『坤輿図識補』第四巻「本編中所収人物略伝」のうちの「俄羅斯帝伯徳瑤初世」

をほぼそのまま借用したものである。

次の第二編は上下ともに「北亜墨利加合衆国部」である。上巻は新大陸移住から独立戦争に至るまでの合衆国史、下巻はその地勢、気候、産物から大統領制度に説きおよび、学校や救貧院（「おすくひ小屋」と和解されている）、聾啞院などの社会制度から冠婚葬祭にまで至る。おくればせながら作者自身が第三編の序文で明かすように、第二編のこの内容は『海国図志』を粉本にしている。清の道光二十二年、魏源によって編まれその後つぎつぎと増補された『海国図志』は、嘉永年間には数十部が渡来したといわれる<sup>9)</sup>。嘉永末年にはアメリカ、ロシア、フランスの部が、安政年間にはプロシア、イギリス、インドの部などが訓点をほどこして翻刻され、それと平行して数種の和解本が出版されている。

魯文はその序においてあたかも原本『海国図志』を参照したかのような書きかたをしているが、その教養からしてこれらの舶載本や訓点本が魯文のタネ本になったとは考えにくい。本文を子細に検討するに、第二編の実際の粉本となったのは、正木篤の『美理加国総記和解』（嘉永七年）や皇国隠士の『新国図志通解』（同年）などの国訳本である（固有名詞の表記から見て、『万国嚆』第二編は前者の方に近い。しかしこのような固有名詞の振り仮名や各巻の構成に出入りがある以外、この二書はまったく同じ書物であるといえるものである）。数多い『海国図志』の和刻本のうち、魯文の利用したものがどれであるかはにはわかには断定しえぬが、第二編そのものは、この『海国図志』一本だけで成り立っており、序文で列挙された書物を引用した形跡は見られない。

その利用の形態というのは要領のよい抄出であり、ときおり漢語をやまとことば風に言い換えてある程度で、一、二編における『坤輿図説』の「解和げ」方と同じ態度である。冠婚葬祭のうち「祭」については、清教徒の移住にまつわる「ぶろですたんどきやう波羅士特教」と「きりしあきやうかどれいききやう額利教加特力教」との確執やニューイングランドの地で「殿堂を起し以て上帝に事へ」んとした条りなどは省かれている。これが「お上」を憚ってのものかどうか（現に『海国図志』の舶載本はキリスト教関係の記事のために差し止めになったといわれているくらいである）<sup>10)</sup> はわからない。『海国図志』に記載されている創生記説話が、「くにひらけたるはじめ、いまだひとあらず、しやうてい上帝一男子をうみ玉ひ、ばんもつのあるじとなし、又一女子をせうじこれにめあはす」という夫婦の礼の始まりとして『万国嚆』第二編下巻にそのまま使われているところなど、文久年間にはすでに幕府の切支丹統制はくずれていたか、あるいはたかが戯作とばかりに目こぼしにあったものか。その他、省略されているのが刑事事件の件数のような細かい数字であったり、あるいは当時の日本人にとってイメージしにくい議会制度や政府の条令などであったりするところからみて、ピューリタンの記述などはこれに準じて削除されたものと見るのが妥当かもしれない。

さて、三編上巻は二編よりさかのぼって、コロンブスの新大陸発見から説きおこされる。冒頭コロンブスがイスパニヤ「はろす」の港を発して大海原をつき進むあたりまでは、初編同様

『坤輿図説』を借り（『海国図志』系の諸本にはコロンブスの記述は多くない）、その行文はおおむね同書巻四上「亜墨利加洲総括」の始めの部分を取る。しかし、行けども行けども大陸の影すら見えぬことに苛立った乗組員たちの暴言に対して、コロンブスが「くわんじ（莞爾）とうちわらひ、……われさきにてんがんつう（天眼通）をもて、にしのかたにせかいあるをしる」などと答えるあたりから作の雰囲気はいと怪しげなものに変化してゆく。話はこのあと主人公のひとりワシントンの両親のことに移るのだが、この父は姓をワシントン、名をメリケンと呼び、南米大陸の発見者アメリキウスの末孫とされる。上巻はこのメリケンが宮廷出仕の際、英女王愛玩の「夜光の玉」を毀損し、その上に侍女ハリナとの密通の廉をもって新大陸に流罪になるところでおわる。

夜光の珠に、不義密通、あるいはその背後で奸計をめぐらす佞官の登場と、江戸式合巻十八番のお家騒動物的世界は、それが「イギリス女王の後宮」であることを忘れさせてしまうほどだが、下巻はさらに奇怪なものになってゆく。三編下巻はこの流罪の船上に一塵の風とともに黒雲がまいおり、メリケン夫婦の前に「ハルマタの島根に住まふ妖魔仙人」が出現する事件で始まる。まんまと妖魔をあざむいて、無事新大陸に到着した彼らの間にはワシントン・ゲオルゲという聡明勇猛な男の子が生まれる。十八才に成長した彼は、毒気を放って人々を苦しめる双頭の怪物を退治に「かくまく山」へと出かける。その帰路、乙女カレルを賊の手中から救いだして、その兄の「豪傑フランクリン」と遭遇する。続く第四編上巻で、ワシントンがフランクリン親子に歓待されるところで話は二つに分れ、孝子アダムス（本文表記は「阿丹士」「あゝだむす」）が齡千歳を経たおろちの化生を退治する物語が展開し、下巻はこのアダムスがフランクリンと出会い、彼からワシントンの虎退治の話を聞くところで終わる。

### Ⅲ 「横浜絵」の時代

以上四編八冊をひとつの作と見る時、そこに大きな断絶があることに人は気付かずにはいられない。第一、二編と三、四編との間によこたわる溝がそれだ。見てきたように『万国嚟』第一、二編は、『坤輿図説』あるいは『海国図志』といった高等地理書を童蒙婦女のための平易な実用書に書き換えた体のものである。ところが後半、第三、四編にいたってそれはまったくおもむきを変えてしまう。第三編の序には「此書の体裁（裁）や、例の稗史の顰に倣へど、寓言架空の説話を設ず、蘭人葛拉墨兒氏が原撰たるを清人の翻訳せし。海国図志を始とし」といいながら、その内実はワシントン豪傑譚、あるいはアダムス毒蛇退治といった、児雷也や頼光の世界を拉し來たったかの如き物語空間を現出せしめているのである。

草双紙は各編の末丁に作者と画工がそれぞれ名を連ねるのが通例である。『万国嚟』一、二編ではそれは「（仮名垣）魯文訳、（一猛斎）芳虎画（図）」であった。それが三編では魯文

「著」となり、四編では魯文「作」と、次第に作者のプレゼンテーションの姿勢が変化している。それはまさに高等地誌の実用地誌への「訳」すなわち和解から、草双紙世界の製「作」へという内実の変化に対応したものであるといえよう。

全四編の画工は前作『富士詣』同様、一人歌川芳虎がつとめている。第一編の挿絵はたとえば五丁裏、六丁表の「ふらんすのでつぼうかちたたらをふむ」図や続く大砲鑄造の場、パリの繁栄、ロンドンの港の賑わいの図など、いずれも『万国新話』や『新国図志通解』など、異国情報書にみられる図版にきわめて近しく、伝統的な浮世絵的挿絵とはまったく異質の雰囲気をもつ。

第二編の口絵「合衆国人<sup>はすたん</sup>波士頓<sup>ちまた</sup>の街巷遊行往還の図」[図版A]、「合衆国民家耕作の図」[図版B]でこのことはさらにはっきりする。構図こそそれぞれの人物がややちぐはぐな感じをあたえるものの、洋服のひだや馬の筋肉の描写に陰影をほどこした（といってもあまりにコントラストがきついたために影の部分はほとんど墨ぬりになってしまっているが）西洋画風のものとなっている<sup>11)</sup>。

すでに十八世紀後半、蘭学の周辺に成立していた陰影法、遠近法といった西洋画の技術は長らくその狭い世界内にとどまっていた。これが凡百の浮世絵師、目はしこい錦絵版元の飛びつくところとなったのは、嘉永六年の黒船一件以後のことである。巷間伝えられる多種の「ペルリ肖像画」がその先陣を切って以来、事態は横浜開港を迎えてピークに達していた。異国人や彼らのもたらす商品あるいはそれが作られた遠い国の風景を題材にして、西洋画の技法をも取り入れたそれらの錦絵は、従来の役者絵や美人画に代表される江戸絵に対して「横浜絵」と総称される。その数六百余種と推定される横浜絵のうち八割が万延から文久にかけてに集中しているという<sup>12)</sup>。『万国新話』の刊行はこの横浜絵ブームのただ中にあったのだ。

画工芳虎は、この横浜絵において作画量ナンバーワンと評される絵師であった。かれの横浜絵を注意深く眺めるとき、そこに描かれる人々の多くがすでに『万国新話』一、二編に登場していたことに気づく。もっとも顕著なのは『万国名勝尽競之内』という角書をもつ一連の異国風景シリーズ（文久二～慶応元年）である。管見の限りにおいて、このシリーズにはすべて「南伝馬二山田屋板」とあって、それが『万国新話』の版元錦橋堂山田庄次郎によって刷り立てられたものであることがわかる。

錦絵版元が草双紙合巻を出版することは珍しいことではない。むしろこのシリーズに添えられた絵解きというべきことば書き末尾に「万国新話の作者 仮名垣魯文訳誌」と記されていることは注意されるべきである。その内容は『坤輿図識』、『海国図志』という、魯文が『万国新話』執筆にあたって利用した書物に多く重なっている。たとえば「英国の大府龍動は<sup>ていふす</sup>爹摸河の上にあり。家屋櫓の歯を挽が如く人民みな福有なり。此河に跨がりて大橋あり。長サ百八十丈、幅四丈、三処に燈台を設け夜はこれに火を点じ行人の便とす。」云々という『英吉利龍動海口』



の「訳誌」は、『坤輿図識』第二巻を敷き写しに書かれた『万国嚆』第一編上巻の「英吉利国部」の記述とほぼ同文である。それは『万国嚆』の売れ行きに気をよくした版元が、二匹目のどじょうをねらって魯文・芳虎コンビで錦絵を刷りだしたとみえなくもないありさまである。

ではその絵のほうを子細にみてゆこう。まず『英吉利龍動海口』[図版C]で、三枚続きのうち右画面に描かれている馬上の士官らしき人物とその前で旗をもつ兵、および左画面の捧銃のような姿勢で直立する二人の兵士は、『万国嚆』二編上巻七丁(ウ)、八丁(オ) [図版D]にそっくりそのままだ。構図としては『万国嚆』のほうがまとまりがあるから、錦絵のほうが原画をばらすかたちで再構成されているように思われる。左画面、直立の兵の前に立つ二人の男女は同じく上巻の十丁(オ) [図版E]にみられたもので、さらにその左側の馬上の婦人も十丁(ウ) [図版F]の女性像そのものである。細部では傘がなくなっていたり、帽子の飾りが変わっていたりするが、どれも一目で同じ人物であることが見てとれる。

同じシリーズの『仏蘭西把里須府』[図版G]では、右画面に三人、中央画面に二人の女たちが描かれているが、すべて二編下巻十四丁(ウ)、十五丁(オ) [図版H]で集って読書や縫いものをする女性群像のうちに見出すことができる。この下巻十八丁(ウ) [図版I]の傘をもった男性は、錦絵中央画面で軍服風の衣裳に着替えて立っている。かれにあい対して左画面でステッキをもつ男は、『万国嚆』ではなんとワシントンその人であったりする(同下巻七丁(オ) [図版J])。ちなみに二編上巻の表紙絵はこのワシントンの鏡像である)。この画面左手奥の男性は、二編下巻口絵の「合衆国人波士頓の街巷遊行往還の図」に描かれた「商官」に酷似している。このほか、「合衆国美女」と題する口絵や「合衆国華盛頓政府の図」など、『万国嚆』にはなんらかの原画の存在を推測させるような図柄がおおくある。

おそらく芳虎は魯文が『坤輿図識』や『海国図志』を粉本にしたのとおなじように、なんらかの書物の挿絵や銅版画類を借り用いたものと見える。そしてその種となるべき原画の数がさほど多くなかったために、いたるところで人物が二度のおつとめをさせられることになったのであろう。

さきの二編口絵「合衆国民家耕作の図」で画面中央にすわりこんでいた農民は、おなじ芳虎の手による『仏狼西国』と題された横浜絵(慶応元年。ただし版元は「両国かゝや」であり、詞書も「菊葉亭露光」によるものである)に登場している [図版K]。ここでそのモチーフとなっているのは画面中央奥に描かれた蒸気車であるが、これはイラストレーテッド・ロンドン・ニュースの挿絵を種にしていることがすでに指摘されている<sup>13)</sup>。

おなじように、二編の本文最終丁に現れる気球は、芳虎の『亜墨利加国』(文久元年)に描かれたそれとおなじものである。挿絵の他の部分にみえるアルファベットらしき文字がほとんどでたらめであるのに対して、この気球の腹部に書込まれた文字がはっきり「C<sup>UN</sup>STITUTION」とよみとれることから、おそらくこの絵の下には、憲法発効の祝典を描いた原画が敷かれてい

たにちがいない〔図版L〕。

これらの粉本がひとり芳虎のみによって秘蔵されたものでなかったことは、同じく文久元年の芳幾によるその名もずばり『万国男女人物図会』と題された錦絵中の数々の人物像が『万国嚟』の、ひいては『万国名勝尽競』シリーズの人物に共通していることから明らかである。

もちろん芳虎、芳幾は同じ国芳門下であったから、芳員、芳盛といった横浜絵をおおく残している弟子たちの間に、タネ本、原画に関する情報交換があったとしても驚くべきことではないかもしれない。彼ら横浜絵の絵師たちは、一方で現実の横浜をスケッチして商館の立ち並ぶ開港場の情景を制作し、他方で写実の及ばぬ異国の風景、風俗画では舶来の銅版画、油絵などを模写することで画題を広げていったのである<sup>14)</sup>。

さて、これら横浜絵がそれまでの美人画、役者絵と異なる点は、その題材のエキゾチシズムとまた陰影法の如き表現技法、そしてときとして遠近法にひきずられたような直線的な構図といったものにあった<sup>15)</sup>。『万国嚟』の挿絵もまた一、二編はまさしくこの横浜絵の特徴をそのまま持つ。ところが後半三、四編にいたって画趣はがらりとかわってしまう。

前半一、二編における人物たちはおおむね洋服と呼びうる衣裳を身にまとい、ややぎこちないといえるものの絵のモデルらしいポーズをとっている。継ぎあわせによる全体の構図のまとまりの無さをべつにすれば、おのおのの人物の様子に不自然さは少ない。これに対して三編では、メリケンやワシントンはズボンの上からスカート様のものをはかされており、覆面姿のフランクリンに至っては国籍不明の怪人としかしいようがないありさまである。三、四編を通じて登場人物たちは芝居絵における役者の如くみえをきり、互いにはっしと睨みあったり、だんまりを決め込んでいる。それよりなにより、後半の中心をなすのが、かくまく山の妖怪退治あるいは毒蛇退治であるように、挿絵の中でも力のこもっているのは、メリケンが睨まえている双頭の怪物、アダムスの突き立てる剣を喉にうけている大蛇といった草双紙おなじみの妖怪変化のものたちなのだ。

ここで芳虎の筆は一、二篇の原画に縛られたかのような窮屈さから解き放たれ、与えられた画面一杯に踊っている。前半の硬直したかのごとき人物たちにかわって、メリケンやワシントンの動きには力がこもる。たとえ芝居絵そのもののポーズであるにせよ、芳虎は自在に筆をふるうことができたにちがいない。そしてそれを可能にしたのが魯文の作りだした物語世界の「見慣れた荒唐無稽さ」にほかならなかった。

#### IV 「自由の女神」と「神仙女」

前半からは予想もし得ない後半のしっちゃかめっちゃかぶりをもたらしたのはいったいなんだったのだろう。『万国嚟』は四篇を書き継ぎ、またその作者であることがネームヴァリュー

であるほどには読者の嗜好に適ったものであったはずだ。にもかかわらずそれは『西洋道中膝栗毛』十五編ほどの長編にもなりえず、あるいは凸面鏡的に開化の世相風俗を手どらまえにした『安愚楽鍋』ほどに魯文の本領を発揮したものともなりえていない。

このことを考えるために、まず、下巻末尾で次編を予告しながらついに放棄された第四編描くところのアダムス毒蛇退治の段を検討して、魯文の着想がいかなるところに発し、どのような展開をもたらすのかをみてゆこう。第四編の序文に添えられた挿画は蛇を啜えて黒雲に翼をひろげる大鷲の姿である。つづく見開きの口絵では大蛇の喉元にきさきき突きつけるアダムスであり、最後の半丁が弓をつがえる「国父」ワシントンとそのうしろで矢の飛びゆく方をみはるかそうとする「アメリカ神仙女」である。この最後の半丁で魯文は「序画口絵総て二葉合衆国の古事を表せり其事实小関姓が和訳せられし合衆国小誌上の卷十三州一致貨錢図解の条に誌せり且仙女の持てる物はヲイレフボーム樹なり」と書き添えている〔図版M〕。

「十三州一致貨錢図解」は、小関三英の姪小関高彦が重訳した『合衆国小誌』（安政二年）に磐溪大槻崇が増補したものである。それは久しく大槻家に蔵されていた一ドル銀貨の図を模写したもので、表・裏の図柄と「真形大如此」という実寸が示されている〔図版N〕。表は鷲が翼をひろげた図、裏は自由の女神の横顔である。それぞれの図の解説は引用は以下のようなものである。

#### 表面

鷲ノ一足ニ箭ヲ握リタルハ一致ノ意ヲ表シ、一足ニ「ヲレイフボーム」ト云フ樹枝ヲ持タルハ独立ノ意ヲ表センナリ。而シテ上頭雲紋ノ下ニ星ノ数十三箇アルハ十三州一致ノ記号ナリ。周囲ノ蕃字ヲ訳スレバ亞墨利加ノ合衆国ナリ。而シテ中間小旗ノ文字ハ一致ノ国々増加ノ意

#### 裏面

半身室女ヲ画キタルハ女子一タビ男子ヲ得テ婚ヲ結ブトキハ其身自立スルコト能ハズ。亜墨利加ハ之ニ反シ一致ノ政治ヲ以テ永代独立スルノ意ナリト。按ズルニ此説果シテ然ヤ否後考ヲ待ツ。上頭ノ蕃字ハ独立ノ義ナリ。而シテ下ノ数字ハ千七百九十八年ノ符号ニシテ即 我寛政十年ノ鑄造ナリ。

このような情報がどこに源泉をもち、また蘭学者たちの間でどのように流通して魯文の元へ行き着いたのかはさておき、ここには彼が口絵の添書きでもったいらしく述べたような、序画口絵二葉が示すアダムスの蛇退治や仙女の「古事」はどこにも記されてはいない。わずかに鷲のアイコンとそれが爪に掴むヲレイフボーム樹が仙女の持つ枝として見出し得るにすぎず、また彼女の上半身が貨幣図裏面の女神像に似ていなくもないといった程度のことであろう。おそらく魯文はこの貨幣図から女神像を「神仙女」と見立てて鷲をその眷属となし、その連想から大蛇を持ち出してきたものとみえる。けだし洋の東西を問わず鷲は毒蛇を退治する勇猛さの表徴で

あった。『白縫譚』にはのちに菊池四勇士のひとりとしてヒロイン若菜姫たちと死闘を繰り広げる力松が、幼時、寺の搭上より投げ殺されんとする所を飛び来たった荒鷲に救い取られるシーンがあり、『児雷也豪傑譚』にもまた旧主の一子を救い出すために児雷也が大鷲に変身するくだりがあった。

『児雷也豪傑譚』は、中国宋代の説話に発して近世後期、読本・浄琉璃・歌舞伎の各ジャンルでクロスオーバー的ヒット作となっていた「自来也」が、天保十二（1841）年には合巻として集成されたものである。『白縫譚』も嘉永二（1849）年の初編刊行の四年後には二世河竹新七（のちの黙阿弥）によって脚色され舞台にかかっている。これらの物語は、その後幾人もの作者と画工によって次々と引き継がれ、明治に入ってもいまだ完結を見ていないというしろものであった。つまり、文久年間のこのとき、『万国噺』の読者であるような人々にとって彼らはリアルタイムで活躍しているヒーローもしくはヒロインだったのだ。

これら近世末期の合巻が、複数の作者による長編化をゆるしたのは、物語の展開がある個性によって幻視された世界を開くのではなく、パターン化された物語の安易な踏襲だったことによる。『万国噺』三、四編を通じてしつこく繰り返される怪物退治、虎退治、乙女の救出といったさまざまな事件はまさにこの江戸草双紙のクリシェそのものである。にもかかわらず、「わしんとんあゝだむすふらんきりんのみたりのもの、きやうだいのぎをむすびて、きたあめりか十三州をどくりう（独立）国となさんとする」さまを描くと予告したその第五編はついに現われることはなかった<sup>16)</sup>。「ヨイレフボーム樹」はその神威を明らかにせぬまま「神仙女」の手に残り、ワシントンのつがえた矢もまた弦を離れえなかったのである。なぜか。

## V 引き裂かれた物語世界

近世の戯作は「世界」と「趣向」の組み合わせの妙に真骨頂をもつ。しばしば引き合いに出される例でいえば、京伝の『忠臣水滸伝』が『仮名手本忠臣蔵』の「世界」に、『忠義水滸伝』の「趣向」をないまぜにしたものであるというように、仇討という筋そのものは『忠臣蔵』のパターンをふみ、登場人物に『水滸伝』中の人物の属性を付与するといった行きかたをいう<sup>17)</sup>。現代人にわかりやすい例をとれば、鳥山明の『ドラゴン・ボール』が、『西遊記』の「世界」に主人公悟空にサイヤ人という宇宙人の属性を与えるというSF的「趣向」を持ち込んだものであるようなたぐいである。

この場合、「世界」は読者にとって熟知のもので、その世界の「筋を通そうとする求心的な働き」に対し、読者をして「新奇の境に埒し去る遠心的な働き」をするのが「趣向」の力というものである<sup>18)</sup>。ロシア・フォルマリズム風にいえば、「趣向」は熟知の「世界」を見慣れぬものにかえる異化作用を引き起こすともいえる。『万国噺』の前半一、二編はこのよう

な意味での戯作性をもたない。たしかにそれは読者に見知らぬ境を開示するものであった。しかしそこにはうがちや茶化しあるいは見立てといった、戯作を戯作たらしめる趣向もなければ、読者周知の「世界」が繰り広げられているわけでもない。いたって生まじめに話を提供する姿勢を保持している。それは、彼が第一編序文で述べるとおり「万里外の情景を諸書の中より抜萃し」た啓蒙的著作になっているゆえんである。

しかしこの原本たる訳書類の忠実な和解という行きかたを守ったのでは、およそ作としてのふくらみ、すなわち前作『滑稽富士詣』のように十編を書き続けてゆく発展性をもたないことは誰の目にも明らかなことであった。当然それは西洋地誌の啓蒙的紹介書をこえて、なんらかの物語的展開を遂げるための求心力を得ねばならない。そこで持ちだされたのが、読者周知の児雷也たち豪傑の世界だったのである。

かくして後半、『万国噺』はその「世界」を手に入れることを得た。ところが一方の要件である「趣向」、すなわち見慣れた「世界」に目をみはるような新味を与える「趣向」を『万国噺』は欠いたままであった。登場人物たちが児雷也や頼光の行動パターンをとることで物語の伝奇性は強調され、その筋は通った。しかしそのことによって、逆に、作がもつべき新奇性は後退してしまったのである。せっかく万里外を舞台にしながら、それは国性爺のもつエキゾチシズムさえ発揮しえていない。『万国噺』においては、虎退治という行為そのものは物語の中で意味機能をもたず、それが虎であることによって加藤清正の、あるいは国性爺の物語同様、舞台が国外であることを示すにすぎない。

弥治郎北八の世界に「海外旅行」の趣向をはめこんだ魯文の『西洋道中膝栗毛』を一九の『東海道中膝栗毛』に対比させて、小林智賀平は次のように述べている<sup>19)</sup>。

魯文と一九において、同じ登場人物を使いながらも、筋の一貫性のとり方に、大きな違いがあるのは、開化期における一般大衆の不知案内<sup>しらない</sup>の西洋漫遊と、江戸爛熟期における万人周知の五十三次の旅という、この時代と場面という二つの違いから、来ているものと思われる。五十三次の各宿場の笑劇では、つなぎ役の人物がいなくても、読者にはすでにそれだけで、身近い感興をわかせるのに充分であった。つまり弥次・北八は、その寸劇を縫ってとじあわせてゆく、糸の役目にすぎないのである。しかし魯文の「西洋道中膝栗毛」は、一九以来皆さまご存知の弥次・喜多そのものを登場させ、その滑稽洒落で引ずりながら、読者を不知案内の外国に連れて行き、そこに展開する寸劇を、いっしょに楽しもう、という趣向になっているのである。

つまり『西洋膝栗毛』十五編の成功は、未知の国々を世界にとったために旅の主人公には一九以来読者に周知の人物を働かせるという、趣向と世界の新旧がともにそのところを得ていたこ

とに多くを負っていた。しかし『万国嚟』における登場人物は、その物語空間と同様「不知案内」な人々であった。いいかえれば魯文が当初扱おうとした対象はそのままではその異事奇聞の遠心力によって物語の世界を一貫性のない情報の断片に分散させてしまう危険性大のものであったのである。

逆にここに筋を通すことを目的に導入された三編以下の兇雷也的世界は、「趣向」の不在によって、物語としての新奇性を失い、「世界」の求心力の強さによって閉鎖されようとしていた。四編末尾で予告された次編の「独立戦争をめぐる三勇士の冒険譚」はその「世界」としては、たとえば『水滸伝』のごとき英雄群像を「ひるぎにあ」（ヴァージニア）の地に集結させる構想のものであったのだろう。しかしその「世界」はついに開示されなかった。物語は異事奇聞の遠心力と伝統的世界の求心力とのあいだで引き裂かれてしまったのである。いやむしろ、その遠心力がありきたりの「世界」の求心性をはるかに越えていたと見るべきなのかもしれない。

もちろんこの異事奇聞はその強い力で魯文自身をそして読者をも惹きつけつづけていた。『万国嚟』と平行して現れた錦絵や合巻はそのことを物語る。しかしそこではもはやストーリーとしての求心性はまったく放棄されてしまっている。『万国名勝尽競』シリーズの異国風景に添えられた「訳誌」は、分散したままで中心部に集ることのない情報の断片である。同じ文久元年にこれまた同じ山田庄次郎から刊行された魯文の『万国人物図会』という合巻は、『万国嚟』の補遺編というべく、この断片を寄せ集めたものにすぎない。それはけっして求心性をもった物語としての時空を形成することはないのである。

『万国人物図会』二編四冊<sup>20)</sup>はすべて、世界各国の国主や英雄豪傑（女王たちにまじって四人の「勇婦」「烈女」も登場する）を想像による肖像画を添えて、それぞれ半丁をさいて紹介する。二編の序文で作者は「毎編引書」として『海国図志』を筆頭に、計十四部の書物をあげているが、その多くは単にこけおどしに並べ立てられたもので本文との引用関係はもたない。それはたとえば、二編上巻の「大英<sup>いぎりす</sup>人格古氏<sup>じんこうし</sup>也墨西<sup>めし</sup>」が、『坤輿図識』巻五「<sup>アウストラリー</sup>豪斯多辣利誌」の「サントウィクス」の項をほとんどそのままもちいたものであり、同じく「<sup>いすはにやもうしやう</sup>伊斯把泥亜猛将<sup>いすはにやもうしやう</sup>可兒<sup>こ</sup>的西<sup>てす</sup>」が同書巻四下「<sup>イタシコ</sup>北亜墨利加誌」冒頭の「墨是<sup>イタシコ</sup>可」からなるように、多く『坤輿図識』に依拠している。

ある時にはたった三行の原文を半丁分にひきのばしたり、逆に数丁にわたる話を適当に切り張りするなど、引用の疎密はさまざまだが、全体的にみて、それは『万国嚟』の制作過程で入手した情報のうち『万国嚟』に用いられなかった部分を拾い集めただけの内容である。見知らぬ国のさまざまな人物は英雄豪傑という伝統的な枠組みによってすくいとられたものの、かれらは「梁山泊」に集結して一波瀾を起こすわけではない。英雄たちの肖像画はたがいに知らん顔をしたまま、それぞれ半丁の断片として虚空のかなたへ拡散する。

## VI 未知情報と旧式回路

しかしながら、戯作としての完成度を問わなければ、このような転換はその後の一般大衆を  
読者とする著作の有りようとしてひとつの可能性を開くものでもあった。回路としての戯作が  
もっていた、俗文体の威力がそれである。江戸において蘭学者のような一部の知識人によって  
寡占されていたさまざまな情報は、近代に入ってこの俗文体の回路にのり、急速に一般大衆へ  
も拡大して行く。明治啓蒙期を代表する福沢諭吉が、その文体の基本を「俗間に通用す」る俗  
文体においていた<sup>21)</sup>ことは、その著述の数々をベスト・セラーにしえた大きな要因であった。  
魯文の『世界都路』十編（明治五年七月）は諭吉の『世界国尽』（同二年八月）の体裁・内容  
をそっくりそのままいただいて書き上げられてたものである。五丁に及ぶ緒言はすでにその長  
さがそれを尋常の戯作でないことを読者に告げている。

「僕<sup>やつがれ</sup> 薄命にして卑賤の蝸廬に産れ。年齒九歳初めて市街の筆堂に登り。其楷摸を習ふこと  
纔に半年」といつになく懐旧的な口吻をもらして、「経籍を学ばんと欲するに自由を得ず。然  
れども素懐止を得」なかった少年時代を嘆く魯文の心性は、たとえば前々年の『西洋膝栗毛』  
の「僕が文盲なる、書は草冊子<sup>くささうし</sup>の外を読ず。何ぞ学ばん、異邦の事情。……杜撰<sup>とせつ</sup>匱漏は、稗官  
者流<sup>もちまへ</sup>の性来なれば」（初編凡例）に比べてまったく異なったものであるといえるだろう。この  
年、魯文四十一歳。すでに戯作界では相応の地位を占めるとはいえ、三条の教憲等一連の文化  
政策によって戯作そのもののレーゾンデートルを問われた後にあつては、自己の半生の意味を  
顧慮せざるをえない時期にあたっていた。そのような時、「纔に仮字<sup>かな</sup>を知る而已の兒童輩をし  
て。既略地球上の景状を解説せしめ。大声俚耳を穿つの功業。将に闇夜の一燈」（世界都路緒  
言）たる諭吉のありようは魯文自身にとっての燈火として輝いたのである。

緒言末尾で魯文は訳書の文体を甲乙二体に分けてこう解説した。

其訳文。漢字と片仮字<sup>かたかな</sup>を用ひ。傍訓に漢語と洋語を専ら兼用する者は甲人勤学の一助たる  
枢要の具にして。現今翻訳の体裁なり。其訳文。専ら俗字と国字<sup>ひらがな</sup>を用ひ。傍訓に洋語俗語  
を以てする者は西洋旅案内<sup>せいようりょくない</sup>の類、通俗訓蒙の老婆心に出て。則ち乙なり。其読者をして難易の別あ  
るも。其益に於けるに。都て甲乙有べからず。

そして魯文は、「文章俗体を脱かれ」ぬ、その『世界都路』を「乙の貧兒等の机上に備え同病  
相憐むの意を表する」ものだと言明したのである。『万国嚆』の「洋書を皇国文字に解きやら  
げ」という啓蒙的姿勢はその拠るべきところを見出した。

同じように『世界国尽』の体裁を借りた『万国地名往来』（明治六年六月）の題言で著者黒

田麴廬は次のように述べていた。

洋書翻訳の法、旧来には専ら其文の雅なるを勤む。故を以て大に俗に遠くこれを解する者、唯読書の人にあり。近來漸くこれを改めて俗に通じ易からしむ。これに由て又小説<sup>マタ</sup>卑史の体を為なり。

稗史小説はその荒唐無稽さをすてて「実」につくことで、新しい酒を盛ることのできる皮囊になり得たのである。これまで近代文体成立において俗文体のはたした役割は、四迷の「余が言文一致の由来」以来、三馬・一九—— 逍遙—— 四迷のラインで強調されすぎてきたように思われる。パンクチュエーションひとつとってみても、そこに蘭学の形成した流れが無視しえないように、近代文体の成立における俗文体の評価が麴廬のような人間によっても側面的に行われていたことは注目すべきであろう<sup>22)</sup>。

明治七年、筆一本の戯作者生活を清算して魯文は横浜毎日新聞社に入社する。論説その他の片仮名まじり漢文脈の毎日新聞の紙面にあって、いささか場違いな俗語俗文体の雑報は多く魯文の筆によるものであろう。翌八年十一月毎日新聞社に在籍のまま創刊した『仮名読新聞』はその俗文体を一紙全面に押し広げたものである。それは『世界都路』緒言で明確になった著述態度を忠実に守っている。

五十三号（明治九年二月十七日）の雑報では見世物小屋で小人島から渡ったという老婆を見せられた子供が、その帰り途に「お父<sup>とつ</sup>さん、小人島といふのは何処の属国で有ませう。世界国尽にもないが六大洲の内に有のか教<sup>しやう</sup>ゑてお呉れ」と尋ねたということを報じて「実に有難い<sup>ありがた</sup>は学校の設け、嘆か<sup>かな</sup>はしきは不具<sup>かたわ</sup>ながら人間を觀せ物として出放題<sup>しやう</sup>の虚<sup>つ</sup>を吐<sup>くちす</sup>き、口糊業<sup>くちす</sup>こそ淺猿<sup>あさまし</sup>けれ」と結ぶ。

同様に、八十九号（同年五月一日）に登場する「今国盛<sup>マタ</sup>爺」という記事は、スイス人とその「雇<sup>めかけ</sup>妾」とのあいだに生まれた子供が父の帰国に際して日本に残るための編籍願いが出されたという、横浜にありがちな日常的雑報記事である。ここでは国性爺は「混血児」の言い換えにすぎず、もはや虎退治のコノテーションを失ってしまっている。『仮名読』はこの年八月十七日に隔日刊から日刊へかわり紙数も四ページと倍増する売れ行きを示したが、日刊第一号には「万国話」欄がもうけられていた。これはそれ以前読者の要望によって掲載されることになった「亜細亜欧羅巴を始め世界各国の珍聞」がひとつのコラムとなったもので、多く末尾にはヘラルド、ガゼット、メール、シカゴトリビューン、香港循環日報といったニュースソースを明記するものである。

およそこんな状態だから、たとえ天竺徳兵衛が万国話欄に登場しても彼はもう妖術遣いではいられない。「万国話」十一号（同年九月十一日）は次のような前書きを付していた。



百六十号にお約束の漁師徳兵衛<sup>てんじくわたり</sup>印度渡海は何に因てと五不審も有ませうから前にも申し上げます通り、故きを温ねて新しきを知る為に魯文<sup>いつそやふるほん</sup>が日外陳籍<sup>もと</sup>舗で購めました宝暦七年丁丑十月〔今より百二十六年前〕の古写本〔太兵衛所持之助九郎写〕を其俚に載せ、彼徳兵衛は実地見聞はしたなれど其頃は学問の道が開けぬゆゑ<sup>あてすいれう</sup>憶測<sup>みちゆき</sup>説の紀行では有ますが、官板の<sup>しやむろきかう</sup>暹羅紀行や当社大新聞に載せました暹羅雑話<sup>てりあは</sup>に照対せると、徳兵衛の渡しし地は全く印度暹羅国にて然も其時の国王は日本人駿州馬場町紺屋の男山田仁左衛門長政なり

すでに徳兵衛は歌舞伎流のきっかいなキャラクターではなく、事実との照合可能な実在の人物としてある。こうして荒唐無稽さという内実を放棄することで、戯作は情報回路としての様式性を温存しうることになる。この時期大新聞を賑わしていたバルカン問題は小新聞『仮名読』にもしばしば登場する時事問題であった。しかしその報道様式は大新聞のそれとはまったく異なったものであった。「万国話」第四号（八年八月二十二日）はトルコ宮廷のクーデターを報じて次のようにはじまる。

今日は口調を変て院本と小説の体裁で土耳其古議事堂の場をお聞に入升。世の為報条左様に五覧チヨンチヨン

君暴なれば国乱れ、大臣権に募る時は、民叛くとの古言<sup>ふること</sup>は、天より下す人の口、世界の通義月と日の、車の轍その跡を、ふみに伝へて知りながら、雲井を凌ぐ位山<sup>くらいやま</sup>、高きに点て塵ひぢの、麓看分ぬ眼の曇り、無明の夢の覚やらぬ、土耳其<sup>ありさま</sup>の国の景況は、うたてくも亦浅猿けれ。

坪内逍遙の『自由太刀余波鋭鋒』（明治十七年五月）の冒頭を髣髴とさせるこの「体裁<sup>かきぶり</sup>」は、その旧式回路がいかに強固に人々を支配していたかを知らしめる。世界史的な時事問題さえも伝統様式の枠組みへと取り込んでしまうやり口は「万国話」欄に一貫している。「二月に七国の新年会<sup>にがつにしちこくのしんねんかい</sup>西洋日暮話<sup>せいようひくらしばなし</sup>」という「標題<sup>げだいい</sup>」をもつ記事（十年一月十六、十七日）は、その前書きでバルカン問題がヨーロッパ諸国にとつての「大地震」であるという認識を示しながら、「会議の国名を人名に換て<sup>ことども</sup> 幼童衆に解り易いやう和訳て五覧に入升<sup>やはらげ</sup>」と述べ、「英太郎」「魯吉」「仏蔵」「李露七」「土耳其」といった面々を登場人物にする台帳仕立てのものとなっていた。しかし冒頭に〔ヘラルド新聞訳和〕と明記するこの記事は、その末尾においても「後が又戦争になるといふ<sup>たとへ</sup> 噺話<sup>はなし</sup>の外国新聞皆さんその気で五覧じろ先翻訳は是切」という「訳者曰」が付されており、あくまでも「翻訳」としての立場を守ろうとしていた。

同じように、同欄第八号（九年九月一日）におけるトルコ記事は語り物の口調で開陳されているが、末尾につぎのように記している。

附て曰該件の記体は専ら俗解<sup>つげ</sup>りを旨として、軍談師<sup>いふこのけん</sup>の口調に倣ふと雖も、原書は「ガゼット」「ヘラルド」「メール」其他の外国新聞に載せたる欧洲電報に因て、少しく翻案の筆を

下せり。看官事実の確<sup>たしか</sup>乎なるを敢て信じ、決て疑ひ給ふ事なかれ。其処は記者が保証<sup>うけあひ</sup>ますから。

すでに語られるべきことがらが事実である以上、どう語るのがジャーナリスト魯文に残された裁量権であった。逍遙が『小説神髓』において、いかに語るかという文体の問題を想像力と事実との関係と同列に問うことで出発をしたように、魯文にとって再び戯作における虚実の問題が浮上してくるのは、越えて十二年の『仮名読』における「毒婦おでんの話し」においてである。事実の群れの向こうに一人の女の架空の物語を読み込むことで、断片的な情報は求心力をもちはじめ。『高橋阿伝夜叉譚』は、そのプロットの伝奇性と新聞における報道性との間の力学という意味において、明治における戯作のひとつの可能性を示していたのである<sup>23)</sup>。

## 注

- 1) 宮武外骨『筆禍史』（朝香屋書店、大正15年10月）、91～92頁。
- 2) 日野龍夫「大惣本目録刊行によせて」（京都大学附属図書館報『静脩』vol. 27, No. 3, 1991年1月）
- 3) 興津要『転換期の文学』（早稲田大学出版部、昭和35年11月）では各論の中に「仮名垣魯文研究」を収め、内容紹介をしている。
- 4) 野崎左文『私の見た明治文壇』（春陽堂、昭和2年5月）、208頁。また『かな反古』（明治28年2月）には、この時魯文がわずか四、五日のうちに地震当て込みの錦絵草稿を二、三十枚も書き飛ばしたことが記されている。
- 5) 『富士詣』第五編凡例には、「余が拙作のふじ詣は今年閏弥生のはじめ初編の稿を起せしより」とある。
- 6) 山口光朔訳『大君の都』中（岩波文庫）、163頁。
- 7) 斎藤月岑『武江年表』（東洋文庫）、179頁。
- 8) 体裁は美濃紙半截二つ折り、各巻五丁の定型である。京都大学附属図書館には四編すべてが所蔵されているが、第二編に二丁の落丁があり、表紙絵も失われている。本文もまた虫損によって判読しがたい部分を多くもつ。国書総目録ではこれ以外に、国立国会図書館に八冊すべて、大阪府立図書館に第二編二冊の所蔵が確認できる。後二者は保存状態が良く、元の表紙も残されている。ちなみに国会本はもと大惣の貸し本だったもので、題箋横にはその分類記号が貼付されている。以下の引用は国会本による。
- 9) 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代 日本人の海外知識』（乾元社、昭和28年3月）、135～139頁。
- 10) 同上。
- 11) 石井研堂『錦絵の影と摺』（芸艸堂、平成6年1月復刊）では「洋画模倣の浮世絵錦絵には、陰影を現はすに可なり苦心した跡が歴々見えて居る、唯淡彩を施したゞけのものも有り、密なる並行線で現はしたのものもある」として、前者の例に北寿、国芳をあげ、後者に貞秀を挙げている（53～54頁）。
- 12) 野々上慶一『文明開化風俗づくし』（岩崎美術社、1978年5月）、4頁。
- 13) Yoshida Mitsukuni, *THE HYBRID CULTURE*. Hiroshima: MAZDA, 1984, p.66.
- 14) 同上。この書では二世広重の横浜絵『亜墨利加販之図』について次のような解説を付している。

“Picture of Flourishing America” is actually copied from a picture of the Royal Palace of Fredericksborg in Denmark. Hiroshige II apparently was prompted to draw this picture after seeing a newspaper report that the Palace had been razed by fire, together with an illustration of the Palace itself. Though the buildings in Hiroshige II’s illustration are hardly American, the people in the foreground bear some resemblance to Americans, many of whom Hiroshige himself must have seen in Japan. Other similar prints indicate the Japanese did have a general idea of how people in the West lived.

ちなみに図版Aに描かれる「商官」一家は、ビクトリア女王一家をモデルにしているものらしいが、芳虎が何を原画にしたのかについてはいまだ確認しえない。

- 15) 明治の浮世絵における直線的な構図と線については、たとえば橋本治が「明治の芳年」(『江戸にフランス革命を!』青土社、1989年11月)において、芳年とその師国芳とを対比させつつ論じている。
- 16) 「鷲と神仙女」のモチーフはのち、「辛未春」すなわち明治四年の刊記をもつ『倭国<sup>やまとが</sup>西洋文庫』の「天主教人鷲に駕て巴理斯に来る」(三編)という趣向となって現われたと見ることもできる。親友河(=岡)丈紀がワーグマンから聞いたというナポレオン伝を元にするというこの作の成立はきわめて興味深い問題であるが、今は措く。
- 17) 中村幸彦『戯作論』(中村幸彦著述集第八巻、中央公論社、昭和57年7月)、145頁。
- 18) 同上、147～150頁。
- 19) 岩波文庫版上巻解題、30～31頁。
- 20) 第一節に引いた岡丈紀の文中「万国人物誌」なる書物は、おそらくこの作をさすものであろう。興津前掲書では一冊二編とされるが、京大付属図書館所蔵の二編四冊は初編の題箋に『万国人物図会』、二編のそれは『万国人物尽』となっている。前掲『鎖国時代 日本人の海外知識』では「二巻一冊四十枚」の『万国人物尽』が紹介されている。
- 21) 「福沢全集緒言」(福沢諭吉全集第一巻、岩波書店、昭和33年12月)、6頁。
- 22) 平田由美「近代文学とパンクチュエーション」(吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』、京都大学人文科学研究所、1985年3月)。
- 23) 平田由美「物語の女・女の物語」(協田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史・下』、東京大学出版会、1995年1月)。

なお、図版の採録はそれぞれ以下に拠る。

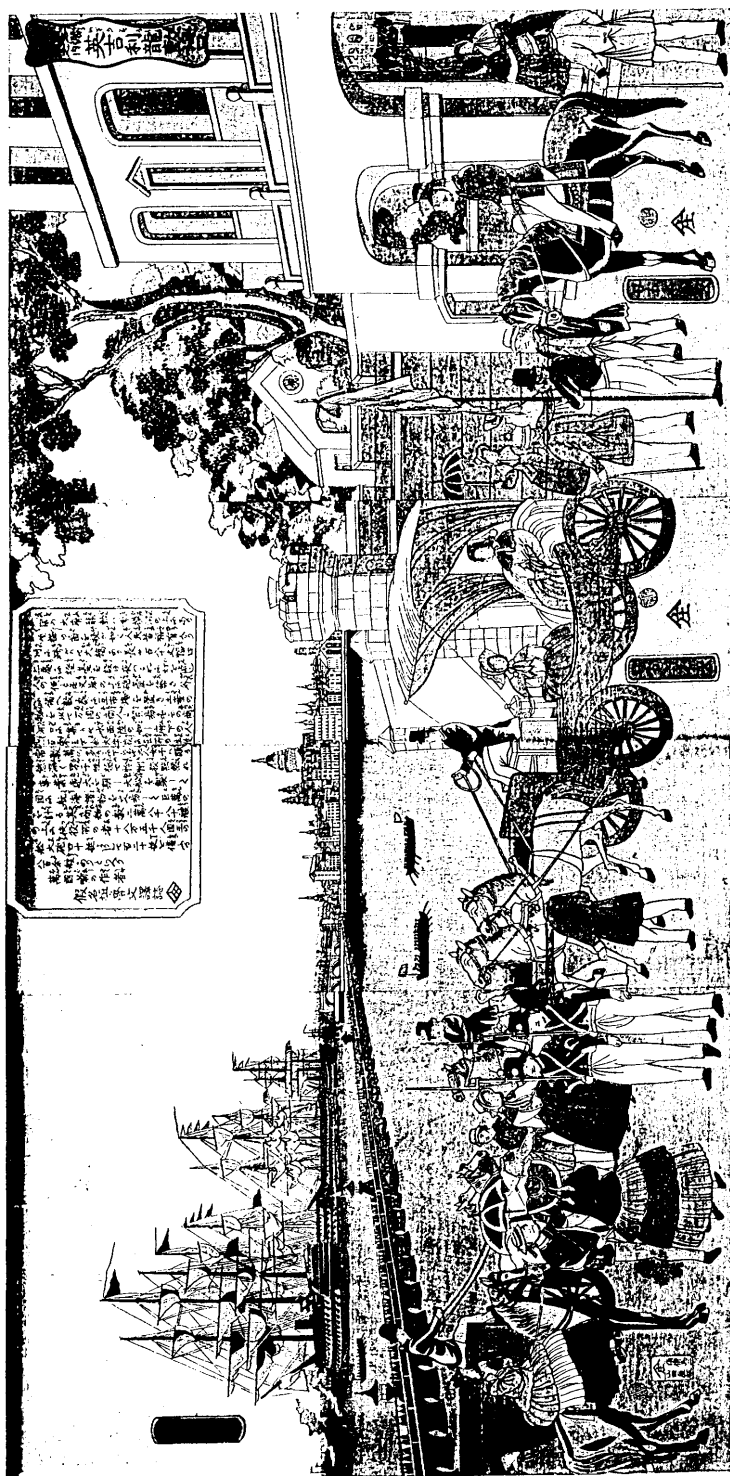
図版A・B・D・E・F・H・I・J・L・M (国会図書館所蔵『童絵解万国噺』)  
 図版C・G・K (小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史2 横浜開港』講談社、1977)  
 図版N (京都府立総合資料館所蔵『合衆国小誌』)



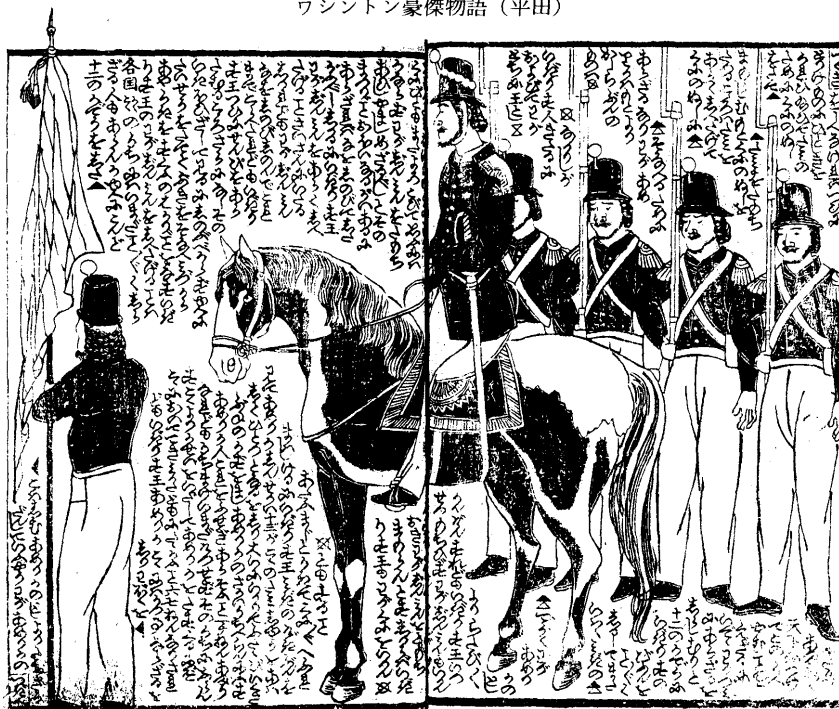
図版 A



図版 B



图版C



図版 D



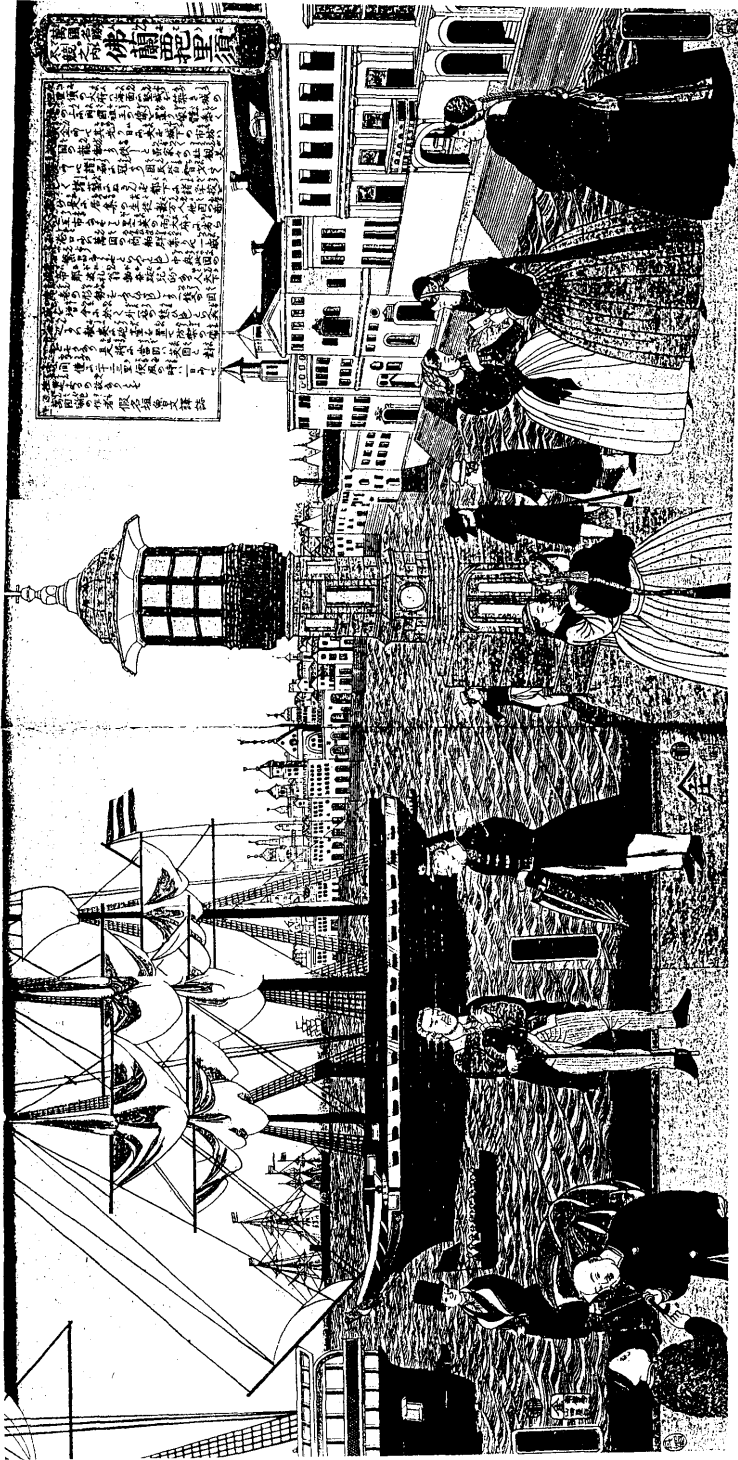
図版 E



図版 F



図版 H



図版 G

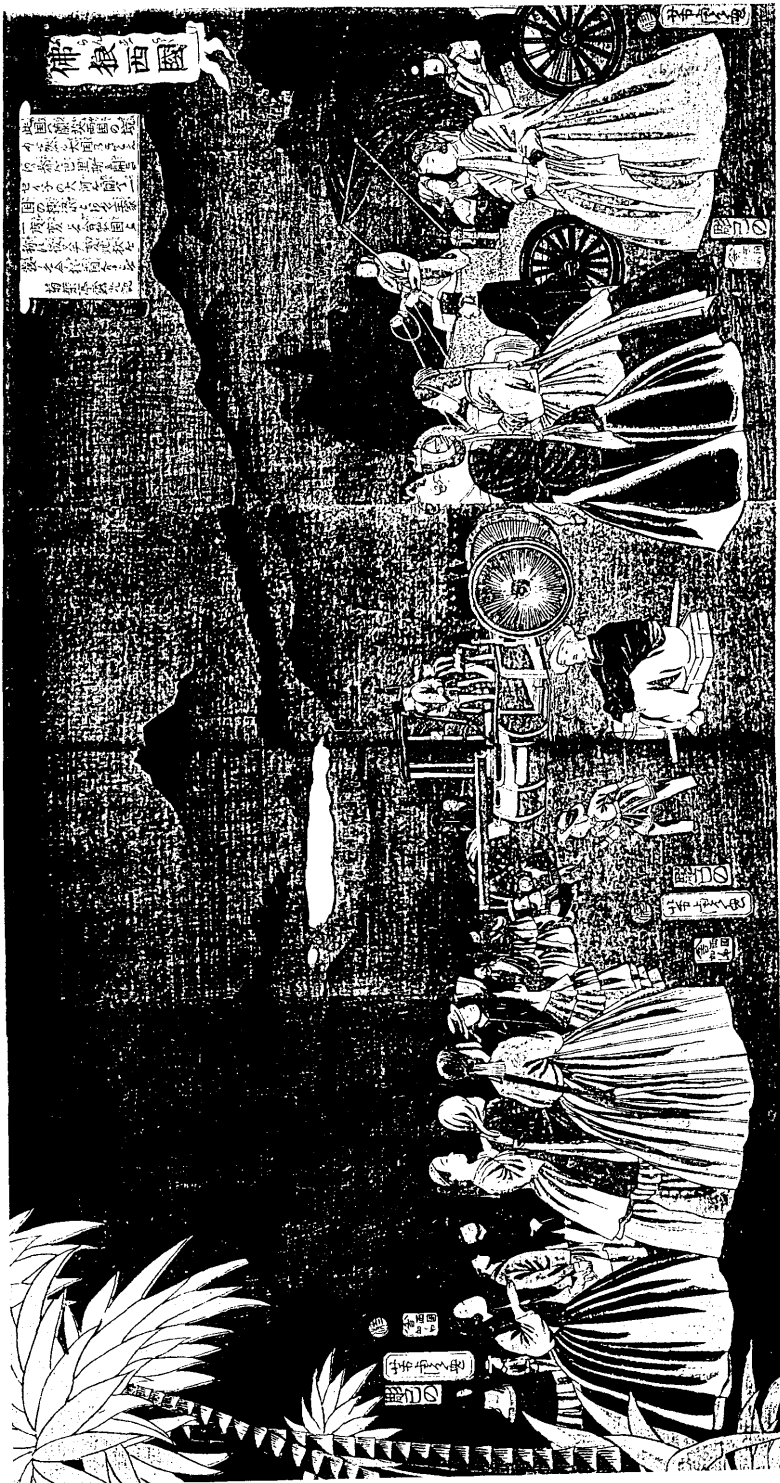




図版 I



図版 J

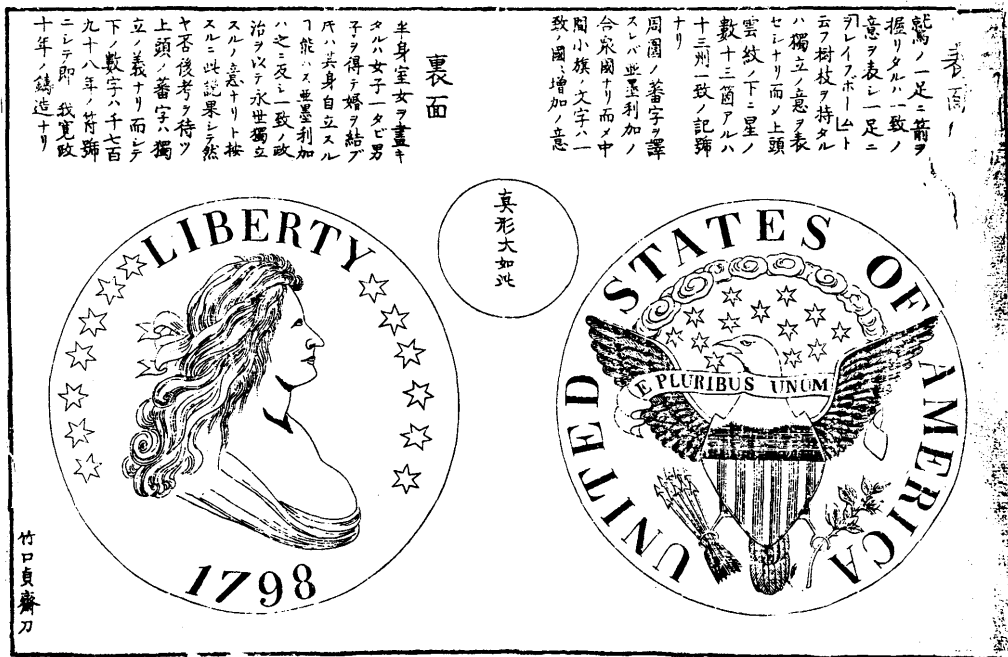




図版 L



図版 M



図版 N